

二重語からみたスペイン語の語彙体系

岡 本 信 照

〈Resumen〉

El «doblete» del español, en su mayoría, está constituido por dos palabras procedentes de un mismo étimo. Una de esas es el «vulgarismo», que completó la evolución fonética, y la otra, el «cultismo», que mantiene su aspecto latino con transformación fonética mínima: por ejemplo, *escuchar – auscultar* (< AUSCULTARE), *cosa – causa* (< CAUSAM), *redondo – rotundo* (< ROTUNDU-), y un largo etcétera. Además de estos dos tipos de vocablos, se encuentra el «semicultismo» cuyo estatuto histórico está situado entre el vulgarismo y el cultismo. Resulta que también existen otros tipos de dobles formados por el vulgarismo y el semicultismo, y por el semicultismo y el cultismo.

En el presente trabajo empezamos por dar una definición precisa del «cultismo» y «semicultismo», teniendo en cuenta la diferencia de los términos «latinismo» y «alomorfo». Y luego, observamos varios tipos de dobles salvo los que constan del vulgarismo y el cultismo. La finalidad consiste en revisar el sistema léxico español a través del concepto del «doblete», y proponer un nuevo método de enriquecer el vocabulario.

0. はじめに

「二重語（英・仏：doublet, 西：doblete）」という用語を『言語学大辞典』（亀井ほか編, 1996）でひもといてみると、「同一起源に遡るにもかかわらず、互いに異なる音形と意味をもつ単語が一つの言語に共存するとき、これを二重語という。その音形・意味が異なるのは、それぞれ部分的に異なる歴史を歩み、互いに異なる音変化・意味変化を被ったためである」¹⁾と明確に定義されている。例えば、日本語の「香ばしい」と「芳しい」はいずれも「香美し」に、「被る」と「被る」^{こうむ}はいずれも「かがふる」に由来し、それぞれ語源を共有する兄弟語彙の関係に当たる。また、英語であれば、chamber「個室，議院」－camera「カメラ」，cattle「家畜」－capital「資本」，warranty「被保証人」－guarantee「保証，担保」といったペアが二重語の典型例とされる。

スペイン語においては、二重語の多くが「民衆語（vulgarismo）」と「教養語（cultismo）」（あるいは「学者語」）のペアで構成される。前者は俗ラテン語以来口頭で受け継がれてきた話しことばとしての語彙、いわば音声ありきの口語体であるとするなら、後者は書物（多くはラテン語）から採られた書きことばとしての語彙、すなわち表記ありきの文語体である²⁾。表1にいくつか例を挙げよう（以下、便宜上、ラテン語語彙は大文字で記す）。

表1：現代スペイン語における典型的な二重語の例

【民衆語】	【教養語】	【語源となるラテン語】
cosa 「物, こと」	causa 「原因」	< CAUSA(M) 「原因」
escuchar 「聴く」	auscultar 「聴診する」	< AUSCULTARE 「聴く」
heñir 「捏ねる」	fingir 「装う」	< FINGERE 「偽造する」
palabra 「単語」	parabola 「寓話」	< PARABOLA(M) 「寓話」
redondo 「丸い」	rotundo 「断固とした」	< ROTUNDU- 「丸い」
sobrar 「余る」	superar 「越える」	< SUPERARE 「上回る」

管見では、スペイン語の二重語を扱った先行研究として、二重語の具体例を最も数多く提示している Gutiérrez (1989)³⁾ のモノグラフや、類義語としての二重語の使い分けを非母語話者のスペイン語教育に適用する教授法を提起した Calvi & Martinell (1997)⁴⁾ の小論が見られる。また、日本語で書かれたものでは、意味機能の観点から二重語の類型論的考察を試みた上野 (1990)⁵⁾ が挙げられる。その他、中・上級レベルの学習者向けに書かれたスペイン語学書の中で、伊藤 (1996)⁶⁾ が二重語の概念を簡潔かつ明快に解説している。

本稿ではスペイン語に存在する二重語についていくつかの問題提起と考察を行い、従来の二重語という言語学的に規定された概念をやや拡大解釈しながら、スペイン語の同族語による連鎖という観点に立脚した語彙体系の把握の仕方を提示しようとするものである。最終的には、スペイン語学習者の語彙習得法への寄与とすることが目的である。また、筆者が Corominas (1980-1991)⁷⁾、および太田 (2012)⁸⁾ に基づいて独自に調査した二重語を可能な限り網羅した一覧表を巻末に掲げ、今後の研究の基礎資料としたい。

1. 二重語に関する若干の考察

1-1 二重語と変異体

最初に、「一言語内に存在する語源を同じくしながら語形が異なる語」のすべてを二重語と呼ぶべきか否かについて考察してみたい（ただし、ラテン語の AMOR(EM) 「愛」がスペイン語名詞の amor 「愛」になり、さらにそこから形容詞形の amoroso 「愛情深い」が造られたという場合は単なる派生関係でしかないので、考察対象から除外する）。

歴史言語学の立場から、二重語について言及した古典的な著作の一つが Lapesa (1981) である。ここには「1語のラテン語から、教養語と民衆語いう2語のロマンス語が生じることがあり得る。〈中略〉多くは全く別の独立した2語であり、使用の際に意識されることがなくなった語源にしか繋がりが無い」と述べられ、「民衆語は教養語よりも具体的で物質的な意味を持つのが常である」という意味特徴についての指摘が為された後で、「スペイン語はこの二重語を、意味の区別のために利用してきた。例えば、教養語の litigar 「訴訟する」は、いくつかある意味の一

部を民衆語の *lidiar* 「闘う」に委ねた」との具体例が挙げられている⁹⁾。また、比較的新しい言語学辞典でも、「二重語は、もはや同音語ではなく、類義語でもなくなった2語で構成される」¹⁰⁾と定義づけられている。本稿の冒頭に挙げた亀井ほか(1996)の定義も合わせて考えるなら、語源を共有する2語のペアが「二重語」と呼ばれるためには、少なくとも次の条件を満たしていなければならないことになろう。

- 1) 導入された経路や時期が異なること。
- 2) 語形すなわち発音や綴りが異なっていること（一般的な話者は別の2語という認識で使用していること）。
- 3) 意味が異なっていること（民衆語は主に具体的、物質的、日常的意味を、教養語は主に抽象的、学術的、専門的意味を有する）。

まず確認しておくべきことは、上記の2)のみを重視して、「語源が同じで語形が違えばすべて二重語と呼ぶ」という単純な見方をするのは正しくないということだ。なぜなら、同一語彙の異形態 (*alomorfo*) を二重語と見なしてはならないからである。例えば *grande* 「大きい」と *gran* 「偉大な」のようなケースをどう扱うべきだろうか。確かに *grande* は名詞に後置されて主に物理的な大きさを表すのに対し、語尾脱落形の *gran* は単数名詞に前置されて抽象的なニュアンスを帯びる。これらを意味の違いと見なせば別の2語になるかもしれない。しかし、複数形なら両者に語形の差異は解消されることから、*grande* と *gran* は同一語の単なる異形態と見るべきであろう。したがって、二重語に含めるべきではない¹¹⁾。言うまでもなく、「厳格な」を意味する *riguroso* と *rigoroso* や、「証明書」を意味する *carne* と *carnet* といったペアは異形態以外の何者でもない。

次に3)の「意味が異なる」について立ち止まって考察してみたい。そもそも、何をもって「意味の差異」と見なすかという問い自体がきわめて難解である。いくつか例を挙げてみよう。*librar* と *liberar* というペアの場合、「解放する」という訳語を当てるなら俗にいう「辞書的な」意味はほぼ同一と言える。一見すると前述の *riguroso* - *rigoroso* と同じような単なる異形態に映るかもしれない。しかしながら、前者はすでに『わがシッドの歌』に文証されている民衆語であるのに対して、後者は19世紀になってから経済学者や法学者が近代的な意味での「解放」を表す新語として使用し始めた教養語である（語源はいずれも *LIBERARE* 「解放する」）。これら2語はその導入時期が大きく異なるうえに、民衆語形は“*librar un cheque*”「小切手を振り出す」や“*librar la sentencia*”「判決を下す」といった使用が可能なのに対し、教養語形にそのような用法はない。「解放する」という基本的意味にのみ着目するなら両者は置換可能と言えるが、すべての文脈で必ずしも置換可能であるとは言えない。したがって、*librar* と *liberar* は同一語彙の変異体などではなく、異なる2語で構成される二重語と見なすべきである。また、*frio* - *frígido* (いずれも「冷たい」)のように、いわゆる「辞書的な」第一義はほぼ同じだが、文体やレジス

ターにおいて明確な違いが見られる語彙ペアも数多い。日常的な言語活動の中で、“La sopa está fría.”「スープが冷めている」という表現はごく自然だが、“(??) La sopa está frígida.”はきわめて不自然である（むしろ、frígidoは「性的不感症の、冷酷な」といった病理学的文脈で用いられる）。このように、本稿で言及する「意味の差異」とは第一義としての意味定義の差異のみならず、文体的差異や使用域（レジスター）による語用論的な相違をも指す。それゆえ、frío-frígidoも二重語として扱わなければならない。他に llama-flama（いずれも「炎」）、hebra-fibra（いずれも「繊維」）、raudo-rápido¹²⁾（いずれも「速い」）などがこのタイプに該当する。

最後に、「同一語源」について考察を加えてみたい。例えば名詞の leche「牛乳」に対応する2つの形容詞 lechero「乳の」と lácteo「乳（状）の」を二重語の関係と見なしてよいのだろうか。確かに両語ともラテン語で「牛乳」を意味する LAC（対格 LACTEM）から派生した形容詞を起源とする。しかし、lecheroは LACTARIU-「乳の」に由来するのに対して、lácteoの供給源となる語は LACTEU-「乳のような、乳白色の」である。古典ラテン語の段階でこれらは別の2語であったからには、lecheroと lácteoが「同一の」語源に遡るとはもはや言えない（ただし、同族語であることは間違いない）。そのため、これら2語は二重語に含めるべきではない。二重語とは呼べない同様の例として、año「年」の形容詞形で、ANNALIS「1年の」から出た民衆語の añal「(羊、牛などが) 生後1年の」と、ANNUALIS「毎年の」を供給源とする anual「1年ごとの」などが挙げられる。

1-2 教養語 (cultismo) とラテン語法 (latinismo)

現代スペイン語語彙のうち、およそ半数はラテン語から借用した教養語だと言われる¹³⁾。この事実は、大量の教養語が採り入れられたからこそ、俗語が「国家語」としての地位を獲得できたことを物語る。本節では、そうした教養語について若干の考察を加えてみたい。まずは伝統的な定義として Lázaro Carreter (1968) をひもといてみよう。

Cultismo – ... se designa a todas aquellas palabras que han entrado en un idioma en épocas diversas por exigencias de cultura (literatura, ciencia, filosofía, etc.), procedentes de una lengua clásica, ordinariamente del latín. Tales voces mantienen su aspecto latino, sin haber sufrido las transformaciones normales en las voces populares.¹⁴⁾ (文学、科学、哲学など文化上の要請により、ある言語に異なった時期に入った語彙すべてを指す。古典語、つまり通常はラテン語に由来する。そのような語は、民衆語に一樣にみられる変形を経ることなく、ラテン語的様相を維持している。)

中世の暗黒時代、教養語の供給源となった語彙の多くは修道院に所蔵されていた古文書の中に眠っていた。識字能力が修道士など一握りの知識人の専有物だった時代、教養語と直に接するこ

とができたのは一部の特権階級のみであったはずだ。今日の教養語となる語彙群は徐々に、そうした修道士や知識人の手で意識的に発掘され、俗語に採り入れられたのである。教養語の導入時期を詳しく見てみると、中世の早い段階から、具体的には13世紀の最古の文学作品の中に見出される。例を挙げると、『わがシッドの歌』には *laudar* 「賞賛する」、*vocación* 「天命」、*voluntad* 「意志」、*oración* 「祈り」といった語彙が用いられており¹⁵⁾、教養派文芸の旗手ベルセオの著作には *exilio* 「追放」、*leticia* 「歓喜」、*flumen* 「河」といった難語がすでに出現している¹⁶⁾。しかしながら、教養語導入の最盛期はルネサンス期あるいは先ルネサンス期に当たる14～16世紀にかけての3世紀間である。創設間もない諸大学の活動がこの動きを推進したことや、人文主義者が古典文献の収集に腐心し、それらを俗語に翻訳していったことがその主因である¹⁷⁾。

俗語の整備が発展途上にあつた中・近世において、万民への学校教育制度などまだ遠い未来の話であり、「書物」や「文字」などというものとは全く無縁であつた一般庶民にとっての言語（少なくとも母語）は話しことばとしての音声言語のみであつた。話しことばにおいては本来のラテン語から文法の簡略化が進み、語彙の形態も意味も変化していく。そのため、「民衆語」のほうは元のラテン語から、程度の差こそあれ語形が乖離して今日に伝わっている。その帰結として、互いに語源を共有しながら、同族語だと一目では気づき難い語彙ペアが構成されたのである。

さて、他方で教養語 (*cultismo*) と並行して「ラテン語法 (*latinismo*)」という用語も頻用される。確かに、口頭で代々語り継がれてきたのではなく、書物の中のラテン語から借用されたという意味では、本章で話題にしている“*cultismo*”も広義の“*latinismo*”に違いない。この区別をめぐっては研究者同士でさえ見解が分かれる。借用の時期や環境に関係なく、ともかく書きことばとしてのラテン語からスペイン語に入った借用語をすべて *latinismo* と呼ぶ立場もあれば、発達過程で通常の音声変化に従わなかった語を *cultismo* とし、*latinismo* は古代ローマ文学からの借用語に限定するという見解もある¹⁸⁾。ここでは、いずれの説に軍配を挙げるべきかを議論するつもりはなく、可視的な範囲で両者の違いを確認するに留めておきたい。

まず、語形については両者に明確な違いが見られる。教養語 (*cultismo*) のほうは、少なくとも語尾に関しては半ばロマンス語化している。名詞に関して、ラテン語 *-TIONEM* に由来する語は一律に *-ción* で、*-SIONEM* は *-sión* で、*-TATEM* は *-dad* で揃えられ（語によっては *-dad*）、形容詞なら *-ALIS* で終わる語は *-al* に、*-OSU-* は *-oso* にと、最小限の音声変化を経た形となっている。もちろん動詞は例外なく *-ar/-er/-ir* のいずれかの型に収められた。一方、「ラテン語法 (*latinismo*)」は、アクセント符号追加は別として、そうした最小の音声変化さえ経ておらず、*campus* 「キャンパス」、*quórum* 「定足数」、*álibi* 「現場不在証明」、*ímpetu* 「激しさ」、*verbi gratia* 「例えば」、*currículum vitae* 「履歴書」などの具体例から明らかなように、*-us*、*-um*、*-rum*、*-ae*、*-tas*、*-is*、*-i*、*-u* といったラテン語特有の語尾を保持している。さらに言えば、前者の *cultismo* の名詞はすべて対格形に由来するのに対し、後者の *latinismo* についてはその直接の語源が主格、属格、奪格など対格以外に求められるものが多い。例えば、*campus* 「キャンパス」、*piscis* 「魚座」という語形は主格であり（対格は *CAMPUM*、*PISCEM*）、*de facto* 「事実上」は奪

格である。

ラテン語法 (latinismo) のもう一つの特徴は、その用法の制限性である。例えば、corpus (cuerpo 「体」と二重語) という語をスペイン語として使用するとしたら、「資料体、コーパス」という学術用語か、「聖体の祝日」という宗教用語に限定され、含意的な意味の拡大はほとんど期待できない。facto (hecho と二重語) という語に至っては、これをスペイン語の文脈で単独で使用する事は一切なく、de facto 「事実上」という慣用句としてしか用いらず、意味にもこれ以上の広がりはない。同様の例に mutatis mutandis 「必要な修正を加えて」や ad hominem 「論敵個人に対しての」といった慣用句レベルのラテン語法が見出される。元は文語ラテン語起源とはいえ、完全にスペイン語として定着し、一定の含意や二次の意味を獲得したものも多く見られる膨大な数の教養語 (cultismo) との決定的な相違点がここにある。今後も新たな使用の可能性を秘めた、いわば開かれた体系をもつ教養語に対して、ラテン語法は閉じた体系しか有しない¹⁹⁾。

1-3 半教養語

それでは、通時的には教養語と民衆語の中間に位置づけられる「半教養語 (semicultismo)」(「準教養語」とも訳される) はどうだろうか。再度、その定義を Lázaro Carreter (1968) から引用してみよう。

Semicultismo – Palabra que, o por su tardía introducción o por cualquier otra cosa, no ha seguido una evolución completa y presenta un aspecto más evolucionado que el cultismo y menos que una voz popular.²⁰⁾ (俗語への導入時期が早かったため、あるいはその他の理由により音声進化を全うしなかった語。教養語よりは進化しているが、民衆語ほどは進化した様相を示さない。)

半教養語の特徴は、非日常的意味を有する一種の教養語であるにもかかわらず、歴史的理由(多くはキリスト教の布教)から一般人の人口に膾炙するようになった点にある。Lapesa (1981) は半教養語に関して、「民衆語並に古く、民衆語と同様に話しことばに属するが、教養語的な記憶から解放された自由な音声変化過程を経なかった語」と定義づけ、その具体例として、virgen 「処女」(< VIRGINEM), ángel 「天使」(< ANGELUM), siglo 「世紀」(< SAECULUM), regla 「規則」(< REGULAM), apóstol 「使徒」(< APOSTOLUM), obispo 「司教」(< EPISCOPUM), milagro 「奇跡」(< MIRACULUM), peligro 「危険」(< PERICULUM), cabildo 「僧会」(< CAPITULUM) を挙げている²¹⁾。一見して明らかのように、半教養語の圧倒的多数を占めるのはキリスト教用語である。これらは布教や礼拝を通じて、一般民衆の聴覚に直接触れる頻度が高かったと推測される「高尚な意味を備えた」語彙群である。こうした特殊な事情により、生粋のラテン語形態を留めることもなく、音声進化を完遂するにも至らなかった半教養語が形成された。先の Lapesa の指摘にあるように、書物媒体を介してロマンス語化した語彙

ではないという意味では民衆語的であるが、抽象的かつ専門性の高い意味を帯びているという点では教養語的であると言えよう。したがって、ラテン語起源の語彙で構成される二重語には「民衆語 vs 教養語」「民衆語 vs 半教養語」「教養語 vs 半教養語」といった3通りの組み合わせが存在することになる。

2. タイプの異なる二重語

2-1 民衆語男性形 vs 民衆語女性形

太田(2012)では、語源を共有する2語の民衆語のペアも二重語として扱われている。例えば、*entregar*「渡す」と*enterar*「知らせる」は共にINTEGRAREから派生しており、語源を同じくするため二重語である(厳密には、教養語の*integrar*「統合する」を含めた三重語である)。また、同一語源の民衆語同士が二重語のペアを構成する場合に多いのが、*bolso*「ハンドバッグ」- *bolsa*「鞆」、*cuchillo*「ナイフ」- *cuchilla*「包丁」など同一名詞の男性形と女性形で対立するタイプである。この種の二重語は通時的に見るとさらに次の4タイプに下位分類できよう。

- 1) 男性形と女性形のそれぞれがラテン語に直接的な由来となる語をもつもの²²⁾：

acto「行為」 (< ACTUM) - *acta*「議事録」 (< ACTAM)
cinto「剣帯」 (< CINCTUM) - *cinta*「リボン」 (< CINCTA)
gesto「身ぶり」 (< GESTUM) - *gesta*「武勲」 (< GESTA)
fruto「成果」 (< FRUCTUM) - *fruta*「果物」 (< 後ラ. FRUCTAM)
leño「丸太」 (< LIGNUM) - *leña*「薪」 (< LINGNA)
velo「ベール」 (< VELUM) - *vela*「帆」 (< VELAM)

- 2) 男性形・女性形のいずれかはラテン語に直接の起源を有するものの、あとの一方はロマンス語に変化した後で類推によって二次的に創作されたもの：

BURSAM > *bolsa*「鞆」 > *bolso*「ハンドバッグ」
 CANNAM > *caña*「葦, 竿」 > *caño*「管」
 CISTAM > *cesta*「籠」 > *cesto*「籠」
 CUTELLUM > *cuchillo*「ナイフ」 > *cuchilla*「包丁」
 HORTUM > *huerto*「菜園」 > *huerta*「果樹園」
 OLIVA(M) > *oliva*「オリーブの実」 > *olivo*「オリーブの木」
 RIVUM > *río*「川」 > *ría*「入り江」

- 3) 男性形・女性形のいずれも直接的にラテン語に語源となる語は存在せず、いずれもロマンス語になってから二次的な派生語として創作されたもの：

*CARICARE > *cargar*「荷を積む」 > *cargo*「任務」 - *carga*「荷物」
 CONSTARE > *costar*「費用がかかる」 > *costo*「費用」 - *costa*「訴訟費用」

- GYRARE「回転する」> girar「回る」> giro「回転, 為替」- gira「巡業, 周遊」
 PACARE > pagar「支払う」> pago「支払い」- paga「給料」
 PARTIRI > partir「分割する, 出発する」> partido「政党, 試合」- partida「出発」
- 4) ラテン語以外の外来語に由来するもの (Germ. =ゲルマン語, Ar. =アラビア語):
 (Germ.) BANK「カウンター」> banco「銀行, ベンチ」- banca「銀行業界」
 (Germ.) MARK > marcar「印をつける」> marco「枠」- marca「商標, 跡」
 (Ar.) YARRA「水瓶」> jarra「(広口の) 水差し」> jarro「(細型の) 水差し」
 (Ar.) NARANYA「オレンジ」> naranja「オレンジの実」> naranjo「オレンジの木」

先述の Lapesa の「使用の際に意識されることがなくなった語源にしか繋がりが無い」という点を重視し、二重語を狭義で捉えるならば、上記 1) ~4) はいずれも同族関係はきわめて透明であるため、むしろ olivo は oliva からの、huerta は huerto からの「派生語」にすぎないという見方も成り立ちそうである (ラテン語の OLIVA には「オリーブの実」と「木」の両方の意味があった)。しかし、本稿 1-1 で掲げた二重語の条件 1) ~3) から逸脱するわけではない以上、スペイン語における語源を共有する民衆語同士のペアも「二重語」に含めて差し支えないであろう。

ここで留意すべきことは、語尾が -o/ -a で対立する名詞ペアのすべてが二重語であるとはかぎらない点である。例えば、plazo「期間」と plaza「広場」という 2 語はどうであろうか。前者はラテン語 PLACIDUM「公判日」に由来するのに対し、後者はギリシア語の πλατεία「大通り」に発するラテン語の PLATEA「道路」が直接の供給源である。中世において両者はそれぞれ plazdo と plaça という全く異質な形態だったのであり、今日見られる両語の類似性は単なる偶然でしかない。二重語ではない同様のケースとして tallo「茎」(< THALLUS「茎」< θαλλός「若枝」) と talla²³⁾「彫刻, 身長」(< 仏 taille < TALEA「棒, 差し木」) や libro「本」(< LIBER, -RUM「本」) と libra「天秤」(< LIBRA「天秤」) などがある。結局のところ、語源に遡らなければ語形の類似が必然なのか偶然なのかの判断は不可能であるため、-o/ -a で対立する 2 語のペアが二重語なのか否かの認定は歴史的観点からでしか規定できないことになる。

2-2 ラテン語以外の外来語と関わる二重語

直接の起源がラテン語以外の言語に求められる語が二重語の一部を構成することもあり得る。例えば、guitarra「ギター」の直接的な借用元はアラビア語の qīṭār であるが、起源はギリシア語の κιθάρα「竖琴」にたどり着く。それゆえ、語源を同じくしながら「ツィター」という別の楽器名を指示する cítara と二重語ということになる。同様の事例は、後期ラテン語の TUNNA「大樽」を起源としつつ、古フランス語を借用元とする tonel「樽」と英語から採られた túnel「トンネル」や、ラテン語の CASTRUM「城砦」がアラビア語化した alqaṣr を借用元とする alcázar「王宮」とラテン語に直接由来する castro「砦集落」との関係にも該当する (ちなみに castillo「城」は CASTRUM に縮小辞のついた CASTELLUM を直接の語源とするため、非常に関連性の

深い同族語である)。

さらには、語源がラテン語にもギリシア語にも関与しない語彙同士の二重語もわずかに存在する。ゲルマン語の BINDE「紐」から派生した banda「帯」と venda「包帯」、トルコ語の TÚLBEND「ターバン」に由来する tulipán「チューリップ」と turbante「ターバン」、最終的な語源はロンバルド語の BALKO「梁」だが、いずれもイタリア語経由で入った palco「ボックス席」と balcón「バルコニー」といった例などである。

2-3 淘汰された民衆語

現代スペイン語において二重語としての対を成す語が存在しない語彙であっても、中世においては二重語を形成していたという事例が見出される。つまり、二重語という語彙の競合関係が、意味やレジスターの棲み分けという形をとって永続するとは限らず、いずれか一方が淘汰され、廃語に追いやられた語も少なくないのである。例えば、中世の文献で「歴史」を意味する語には estoria という民衆語が通常用いられていた。ところが、近世初期にラテン語の綴りを意識した語形の historia が台頭し始めると、異音同義語で民衆語の estoria は衰退へと向かった。

Dworkin (2012)²⁴⁾ にそうした語彙の実例が豊富に紹介されている。主なものを抜粋して、表 2 に掲げてみよう (ダガー [†] はかつて存在し、現在は消滅した語。原則的に意味は民衆語も教養語も同じ)。

表 2：中世期に一時的に存在した二重語の例

【廃語になった民衆語】	【現行の教養語】	
† aorar	- adorar「崇拜する」	(< ADORARE「崇拜する」)
† eivigar	- edificar「建設する」	(< AEDIFICARE「建設する」)
† frucho	- fruto「成果」	(< FRUCTUM「果実, 成果」)
† malfestar	- manifestar「表明する」	(< MANIFESTARE「明らかにする」)
† amochiguar	- multiplicar「増やす」	(< MULTIPLICARE「増やす」)
† preigar	- predicar「説教する」	(< PRAEDICARE「告知する, 説教する」)
† testemuña	- testimonio「証拠」	(< TESTIMONIUM「証言, 証拠」)
† viesso	- verso「韻文」	(< VERSUS「韻文」)

このように意味の差異を成さない二重語が古スペイン語において一時的に存在した事実は上野 (1991) ですすでに取り上げられており、最終的に一方が駆逐された理由について、「表現レベルでの余剰性から脱却すべく言語の経済性の原則が作用した結果だ」との指摘が為されている²⁵⁾。これらの語彙ペアはほぼ同義関係にあるため、いずれか一方の語は早晚消滅する運命にあったのだろう。その際、好まれて残ったのが多くは威信を伴う教養語のほうだった。15世紀末から16世紀以来、俗語カスティーリャ語の国語化推進にともなって文章表記(書きことば化)が意識され

るようになり、特に人文主義者はラテン語に似せた語形をより好んで書くという言語思潮が背後にあった。

この趨勢に起因する「俗語のラテン語化」という傾向については、民衆語の淘汰のみならず、別の側面でも顕在化した事例が多々見受けられる。例えば、efecto「効果」という語（文献初出1438年）はラテン語 EFFECTUS からの借用であり、もちろん教養語である。しかし、近世初期に俗語カスティーリャ語に入ると子音 *-e* の直前の *c[k]* が消滅し、当時は“efeto”という半教養語形が流布した。一方、16世紀の人文主義者の中には、この語を efecto とラテン語を意識した語形で意図的に表記する書き手も現れた。18世紀になり、王立アカデミーが正書法を決定する際に採用したのが半教養語の *efeto ではなく、ラテン語形 (forma latinizante) の efecto のほうだった。その結果、一旦この語から消滅した *c[k]* が復活し、今日まで伝わることとなった。本節で取り上げた史実は、言語の史的変遷過程において自然進化的な側面のみならず人為的な側面もまた、いかに大きな影響を及ぼしたかを示す証左となろう。民衆語という本来語が一般大衆の口頭表現での継承という自然進化的帰結だとすれば、教養語とは、俗語の豊穡化と威信づけを目的として特定の人物が意識的に実行した古典語からの借用という人為的な営みの結果である。この両者が衝突したとき、同義関係が解消されないままであれば、経済性の原則によりいずれか一方の語彙は忘却の淵に沈んだ。反対に、意味の差異化が起これば「二重語」という共存関係が保持された。二重語とは、「自然」と「人為」が折り合いをつけた歴史的所産だとも言えよう。

3. 「二重語」の拡大解釈

3-1 民衆語名詞 vs 教養語形容詞 (= 準-二重語)

本章では、「民衆語 vs 教養語」という二重語の概念を敷衍しながら語彙の派生構造について再考し、ひいては語彙学習への適用可能性についても言及してみたい。例えば、hijo「息子」、lluvia「雨」、mes「月」といった民衆語に対応する教養語の名詞形は過去にも現在にも存在しないが、それぞれの形容詞形として filial「子としての」、pluvial「雨の」、mensual「月々の」なら教養語の形で存在する (*hijal, *lluvial, *mesal という語形は存在しない)。今ここに民衆語として挙げた3つの名詞の直接の起源はそれぞれラテン語対格名詞の FILIUM「息子」、PLUVIAM「雨」、MENSEM「月」であり、対応する形容詞形のほうはそれぞれ FILIALIS, PLUVIALIS, MENSUALIS²⁶⁾である。語源となるラテン語を見たかぎりでは、互いに派生関係であることが一目瞭然であろう。1-1で提示した定義に従うならば、hijo – filial, lluvia – pluvial, mes – mensual のペアを二重語とはもちろん呼べそうにない。そうかといって、意味論的には〈名詞 – 形容詞〉の関係であることが明確である以上、それぞれを「無関係な2語」として扱うわけにもいかない。これらの形容詞は、hermano「兄弟」から hermanal「兄弟の」が、semana「週」から semanal「毎週の」が派生したのと同じ様式で、ロマンス語になってから二次的に形容詞が派生したものでは決してない。ましてや、carne「肉」 – carnal「肉体の」や otoño「秋」 – otoñal「秋の」の

ペアがそれぞれラテン語の CARNEM 「肉」 - CARNALIS 「肉体の」、AUTUMNUM 「秋」 - AUTUMNALIS 「秋の」という派生語ペアから揃って民衆語になったケースとは事情が全く異なる。あくまで同一概念の〈名詞 - 形容詞〉という意味場の関係性を維持するために、民衆語に生じた派生関係というパラダイムの欠落部を補填する構成素として教養語形容詞形が後から導入されたということである。同一概念の〈名詞 - 形容詞〉という関係を通時的観点から改めて見直してみよう。そうすると、次の3通りに分類されることになる（教養語同士やラテン語以外の外来語は除く）。

- 1) 民衆語名詞から直接的に民衆語形容詞が派生したもの：
 - hermano (< GERMANUM) → hermanal (ラテン語に対応語なし)
 - semana (< SEPTIMANAM) → semanal (同上)
- 2) 民衆語名詞と民衆語形容詞ともにラテン語から音声変化を被ったもの：
 - carne (< CARNEM) - carnal (< CARNALIS から変化)
 - otoño (< AUTUMNUM) - otoñal (< AUTUMNALIS から変化)
- 3) 民衆語名詞の対応語として教養語形容詞から補填されたもの：
 - hijo (< FILIUM) - filial (← FILIALIS から補填)
 - lluvia (< PLUVIAM) - pluvial (← PLUVIALIS から補填)
 - mes (< MENSEM) - mensual (← MENSUALIS から補填)

語彙習得の視座に立脚するならば、こうした語彙体系を形態・意味の双方から認識することが学習効率の助けとなる。上記1)と2)は語源に遡るまでもなく、学習者は関連性を瞬時に認識できるはずである。すなわち、同族関係の透明度が高い語彙ペアである。ところが、上記3)はどうだろうか。学習者が関連性を察知するには、多少の困難を伴うと言えないだろうか。そこで、本来の二重語の定義からは外れるものの、学習目的を前提とした語彙体系認識の便宜上、3)のような場合も敢えて広義の二重語、いわば「準-二重語」と解釈してはどうかというのが本稿における第一の提唱である。もちろん、このような語彙ペアを挙げるなら枚挙に暇がないであろう。

表 3-1：民衆語の名詞と意味上で対を成す教養語の形容詞の例 (1)

【民衆語名詞】		【教養語形容詞】	
letra 「文字」	(< LETRAM)	- literal 「逐語的な」	(< LITTERALIS)
lado 「横」	(< LATUS)	- lateral 「側面の」	(< LATERALIS)
nombre 「名前」	(< NOMEN)	- nominal 「名目上の」	(< NOMINALIS)
madre 「母」	(< MATREM)	- materno 「母方の」	(< MATERNU-)
monje 「修道士」	(< MONACHUM)	- monacal 「修道士の」	(< MONACLAIS)
noche 「夜」	(< NOCTEM)	- nocturno 「夜の」	(< NOCTURNU-)

ojo 「目」	(< OCULUM)	-	ocular 「目の」	(< OCULARIS)
oreja 「耳」	(< AURICULAM)	-	auricular 「耳の」	(< AURICULARIS)
oro 「金」	(< AURUM)	-	áureo 「金の」	(< AUREU-)
padre 「父」	(< PATREM)	-	paterno 「父方の」	(< PATERNU-)
pecho 「胸」	(< PECTUS)	-	pectoral 「胸部の」	(< PECTORALIS)
raíz 「根」	(< RADICEM)	-	radical 「根本的な」	(< RADICALIS)
toro 「雄牛」	(< TAURUS)	-	taurino 「雄牛の, 闘牛の」	(< TAURINU-)
vida 「生活, 生命」	(< VITAM)	-	vital 「生命の」	(< VITALIS)

表 3-1 に挙げた語彙ペアについて、語源を意識することなくスペイン語の部分だけを学習者が見ても、語形から関係性を認識するのは語彙によって容易ではない。しかしながら、語源となる語と関連づけ、二重語の観念を援用した瞬間、その関係性が鮮明に浮上する。これが筆者の提唱する二重語というコンセプトの言語学習への応用可能性である。もっとも、表 3-1 の例は同一概念の「名詞-形容詞」関係が意味上で明白であるため、意味を頼りにすれば、勘の良い学習者なら同族関係に気づくかもしれない。しかし、次の場合はどうだろうか。

表 3-2 : 民衆語の名詞と意味上で対を成す教養語の形容詞の例 (2)

【民衆語名詞】		【教養語形容詞】	
cabeza 「頭」	(< CAPITIA)	-	capital 「主要な; [名] 資本, 首都」 (< CAPITALIS)
juego 「遊び, 競技」	(< JOCUM)	-	jocosu 「滑稽な」 (< JOCOSU-)
pueblo 「町, 国民」	(< POPULUM)	-	popular 「国民の, 人気のある」 (< POPULARIS)

表 3-2 に挙げた例であれば、学習者が現代スペイン語の知識だけを頼りに、語源を度外視したまま、語形はおろか意味からも同族関係の認識へと到達するには大きな困難を伴うであろう。しかしながら、ここに二重語の基本概念を適用し、語源的繋がりを明示した瞬間、そこに立ちほだかる障害は取り除かれる。このように、語彙間に潜在する歴史的関係性を学習者に意識づければ、語彙力の定着に向けて一定の効果が期待できるのではないだろうか。

3-2 部分的二重語

語彙学習目的で二重語の概念を応用的に援用することができるケースがもう一つ考えられる。例えば、llorar 「泣く」 (< PLORARE) という基本動詞に対応する教養語はスペイン語に存在しない。しかし、派生的な動詞 deplorar 「嘆き悲しむ」 (< DEPLORARE) や implorar 「嘆願する」 (< IMPLORARE) は存在する。確かに、ラテン語の段階で独立した別の語と認識されていたのであろうが、いずれも基本形の PLORARE から派生的に作られた複合語であることを考慮すれば、「究極の」語源は同一だと言えなくもない。それゆえ、llorar と deplorar/ implorar も広

義の二重語と見なせないかというのが第二の提唱である。

これと同様のケースを想定するなら、おそらく膨大な数の語群が該当することになるだろう。

表4にいくつか例を挙げてみよう（イタリック体が語源的に対応する形態素）。

表4：複合語の教養語の一部と民衆語の基礎語彙が二重語を構成する例

【民衆語】		【部分的に教養語を含む語】
hierro「鉄」	(< FERRUM)	- <i>ferro-carril</i> 「鉄道」
humo「煙」	(< FUMUM)	- <i>per-fume</i> 「香水」
onda「波」	(< UNDAM)	- <i>in-unda-ción</i> 「洪水」
sueño「夢」	(< SOMNUM)	- <i>somní-fero</i> 「睡眠薬」
hacer「作る」	(< FACERE)	- <i>satis-facer</i> 「満足させる」
helar「凍らせる」	(< GELARE)	- <i>con-gelar</i> 「冷凍する」
huir「逃げる」	(< FUGIRE)	- <i>re-fugiar</i> 「避難する」
pedir「頼む」	(< PETIRE)	- <i>com-petir</i> 「競う」

語彙を体系的に把握することが学習の便宜上有効であるとするならば、ある教養語の形態素の一部が、民衆語の基礎語彙と語源を共有することがあり得ると認識することに大きな意義が見出されよう。そこで、上記のような関係にある語彙のペアも広い意味での二重語と見なし、いわば「部分的二重語」を構成していると考えたい。

4. むすびに代えて — 語彙力増強学習への応用可能性 —

二重語の大半は、表記言語を通じて教養語が一般に広まり、やがて人口に膾炙するようになったからこそ発生した歴史的所産である。元はイベリア半島の一方言にすぎなかったカスティリャ語という俗語に教養語が大量流入したことにより、この言語はかつてない語彙の豊饒化を経験した。その結果、基本的意味は同じでもニュアンスやスタイルが異なる、言うなれば「似て非なる」語彙の共存がもたらされた。つまり語彙群に「層」が形成され、使用域（レジスター）が細分化されたのである。さらに、本来語である民衆語は口頭伝承という限られた手段でしか受け継がれなかった語形であるため、例えば名詞形は俗ラテン語から継承されたが、対応する形容詞形は初期ロマンス語に存在しないなど、派生関係の範疇には不可避免的に「歪み」が発生した。こうした歪みを是正する役割を担ったのが教養語だった。教養語の導入によって、スペイン語を含めた俗語ロマンス語においては「語彙体系の再構造化」が果たされたとも総括できよう。

そこで、二重語を意識しながら語源的に関連があると認定される語彙群を連鎖的にたどってみよう。そうすると、図1のように一見無関係に思えるような語彙同士の同族関係が可視化される。つまり、同一の遺伝子を共有する一連の語彙群を一括することにより、複雑な様相を呈する

かに見える語彙群を容易かつ体系的に把握することが可能となるのだ。具体例として、ラテン語 LEX「法」(対格 LEGEM) を出発点とし、lege- という遺伝子的形態素を何らかの形で含んだ語彙体系を図式化してみよう(イタリック体は民衆語)。

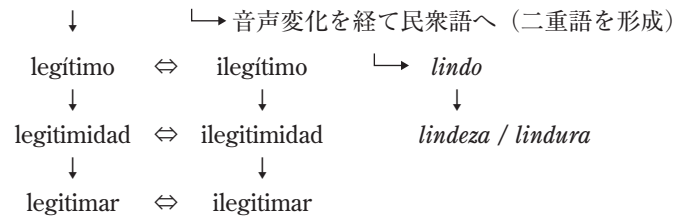
図1：基本語 LEX から派生した語彙体系

LEX「法」(単・主) > LEGEM (単・対) > ley

↳ 形容詞形(1)：LEGALIS「法の」



↳ 形容詞形(2)：LEGITIMUS「合法的な」



次の図2は、ラテン語 REX「王」(対格 REGEM) を基盤とし、rege- という遺伝子的形態素を内包する語彙連鎖²⁷⁾ のモデルである(イタリック体は民衆語または半教養語)。

図2：基本語 REX から派生した語彙体系

REX「王」(単・主) > REGEM (単・対) > rey



派生動詞(1) : DIRIGERE 「整列させる, 導く」 > dirigir

↳ 過去分詞形 : DIRECTUS 「真っ直ぐな」 > directo → director → directorio

↳ 音声変化を経て民衆語へ (二重語を形成) → *derecho* → *derechismo* / *derechizar*

↳ 派生名詞 : DIRECTIO (NEM) 「整列」 > *dirección*

派生動詞(2) : CORRIGERE 「修正する」 > corregir

↳ 過去分詞形 : CORRECTUS 「修正された」 > correcto ⇔ incorrecto

↳ 派生名詞 : CORRECTIO (NEM) 「修正」 > *corrección*

派生名詞(3) : ERIGERE 「立てる, 建設する」 > erigir

↳ 音声変化を経て民衆語へ (二重語を形成) → *erguir* → *erguimiento* / *erguido*

↳ 過去分詞形 : ERECTUS 「真立した」 > erecto → erector / *eréctil*

↳ 派生名詞 : ERECTIO (NEM) 「直立」 > *erección*

一般論として、暗記という作業の効率化を図る有効な手段の一つが「関連づけ」であることは言を俟たない。暗記の対象が外国語学習における膨大な量の語彙であれば、「関連性」の理解はなおさら不可欠となる。そのためのイメージ・モデルが図1および図2で示された同族語の語彙連鎖、すなわち共通遺伝子を含む語彙を包括的にたどるという手法である。上記の語彙連鎖モデルの特徴は、派生関係や反義関係を基軸としつつ、「二重語」という歴史言語学の概念をも採り込んでいる点である。本稿が主張する語彙連鎖モデルが語彙の体系的把握を容易なものとし、語彙知識の整理に資する効果が見込めるのであれば、今後、言語教育における何らかの応用可能性を模索してみるだけの価値があると言えないだろうか。

注

- 1) 亀井孝／河野六郎／千野栄一 [編] (1996) 『言語学大辞典』第6巻, 三省堂: 「二重語」の項目参照。
- 2) もちろん、教養語のすべてが現代語において「学術的」あるいは「抽象的」であるとは限らない。 *familia*, *claro*, *cultura* といった、今日では日常的に頻用される語彙にも教養語は多数存在する (仮にこれらが民衆語なら、**hamija*, **llaro*, **cuchura* となっていたはずである)。導入時においては庶民にとって難語であったものが、時代の経過とともに普及し、教養語であることが忘れられたまま日常的に使用されることはどの言語でも起こり得る。
- 3) Gutiérrez, Belén (1989), *Estudio histórico-semántico de los dobles múltiples en español moderno*, Universidad de Granada.
- 4) Calvi, M. Vittoria & Martinell, Emma (1997), «Los dobles léxicos en la enseñanza a extranjeros», *Actas de los Congresos de ASELE VIII*, Alcalá de Henares, pp. 227-239.
- 5) 上野勝広 (1991) 「スペイン語における〈二重語〉——ラテン語借用語 (cultismo) の意味機能を中心に——」 『明治学院論叢』473, 39-50 頁。

- 6) 伊藤太吾 (1996) 「スペイン語の誕生に向けて」 山田義郎 [監] 『スペインの言語』 同朋舎出版, 2-48 頁。
- 7) Corominas, Joan (1980-1991), *Diccionario crítico etimológico castellano e hispánico I-VI*, Gredos, Madrid.
- 8) 太田強正 (2012) 『スペイン語語源辞典』 春風社。
- 9) Lapesa, Rafael (1981⁹⁾), *Historia de la lengua española*, Gredos, Madrid, p. 110.
- 10) Almaraz Varó, E. & Martínez Linares, M. A. (2004²⁾), *Diccionario de lingüística*, Ariel, Barcelona, p. 218: “Un «doblete» está constituido por dos palabras con un mismo origen etimológico. Se trata de palabras, . . . que ya no son homófonas y han dejado de ser sinónimas.”
- 11) 同様のケースとして tanto – tan が挙げられる。また, mucho と muy も, 現代語の認識ならもはや完全なる別の2語だと言えるだろうが(辞書は別項目), 通時的に見ればいずれも MULTU- に遡り, 音声進化の途中段階として想定される *muito から語尾 -to が脱落した結果が muy である。そうした視座に立てば, mucho – muy は二重語と見なすことは可能だが, ここでは議論の対象としない。
- 12) このペアのレジスターは例外的で, 民衆語の raudo が詩などでしか用いられない雅語であるのに対し, 教養語である rápido のほうが日常的で頻度ははるかに高い。民衆語と教養語の役割分担の逆転現象は, injertar 「(医学用語として) 移植する」と insertar 「(一般的意味で) 挿入する」など, ほかにも稀に見られる。とはいえ, 日本語においても本来の和語である「みなも(水面)」、^{たお}「^{みやび}嫺やか」, 「雅」といった語が現代では文語的・非日常的と認識されている一方で, 「すいめん(水面)」, 「微妙」, 「不(可)思議」といった元来は難語であったはずの漢語が, 現代では日常語として現に通用している。そうした意味では, 歴史的に見て導入時に文語であったものが必ずしも文語のまま存続するわけではないという事実を指摘することできよう。
- 13) Dworkin, Steven N. (2004), «La transición léxica en el español bajomedieval», Cano, R. (coord.), *Historia de la lengua española*, Ariel, Barcelona, p. 649.
- 14) Lázaro Carreter, F. (1968³⁾), *Diccionario de términos filológicos*, Gredos, Madrid, pp. 124-125: “cultismo” の項目。
- 15) Lapesa, *op. cit.*, p. 220.
- 16) *Ibid.*, pp. 227.
- 17) 詳細は Dworkin (2004), pp. 649-654 および Lapesa, *op. cit.*, pp. 260-262 参照。
- 18) Dworkin Steven N. (2012), *A History of the Spanish Lexicon*, Oxford University Press, New York, p. 158.
- 19) latinismo は, 英語やフランス語をはじめとする他のヨーロッパ主要言語と形態・意味の双方を共有する。対して, cultismo は語形と意味が各国語によって微妙に(あるいは大きく)異なる。この点も両者を分かつ特徴と言える。
- 20) Lázaro, Carreter, *op. cit.*, p. 363: “semicultismo” の項目。
- 21) Lapesa, *op. cit.*, pp. 108-109.
- 22) この場合, 男性単数対格 -UM / 女性単数対格 -AM に由来するものと, 中性単数対格 -UM / 中性複数対格 -A に由来するものが混在する。概して, -o/-a で交代する二重語は huerto – huerta, leño – leña, velo – vela のように, 男性形は [+単独性] あるいは [+小規模] といった意味特性を持ち, 女性形は [+集合性] または [+大規模] といった正反対の意味特性を帯びて対立する。こうした機能分化は, 男性形語尾 -o がラテン語男性形ではなく中性単数に, 女性形の -a は女性名詞ではなく中性複数に由来する事実がその出発点になったようである。その後, 語源に関係なく, 「小規模 = -o; 大規模 = -a」という類推が他の語彙にも及んだものと思われる。この点に関しては Lapesa, *op. cit.*, p. 74 参照。
- 23) ただし, この語は talle 「腰回り, 背丈」と二重語の関係にある。

- 24) Dworkin (2012) , p. 161.
- 25) 上野, 前掲稿, 46 頁。
- 26) MENSUALIS という語形は後期ラテン語のものであり, 古典ラテン語では MENSTRUALIS といった。
- 27) ここで用いた「語彙連鎖」とは同系語彙の成り立ちをたどるというパラダイグマティックな関係のことであり, 文中の共起語彙同士の連結というシンタグマティックな関係のことではない。

【参考資料】スペイン語の二重語（三重語・四重語）一覧

二重語(1) 民衆語 vs 教養語；民衆語 vs 半教養語；半教養語 vs 教養語

vulgarismos (民衆語)	semicultismos (半教養語)	cultismos (教養語)	étimos (語源)
apertura 割れ目		apertura 開設	APERTURA(M) 開けること
	afeitar 剃る	afectar 影響する, 装う	AFFECTARE 熱望する, 装う
	afición 愛好, 趣味	afección 疾病, 影響	AFFECTIO(NEM) 影響, 気分
agraviar 侮辱する		agrarar 悪化させる	AGGRAVARE 悪化させる
agüero 前兆, 縁起		augurio 前兆	AUGURIUM 占い
alma 魂		ánima 靈魂	ANIMA(M) 微風, 息, 活力, 精神
ancho 広い		amplio 広範な	AMPLUS 広大な, 豊富な
ancla 錨		áncora 錨	ANCORA(M) 錨
andanza 放浪		ambulancia 救急車	AMBULANTIA 歩き回る
artejo 関節		artículo 記事	ARTICULUS, -UM 関節, 章
ayuntar 合わせる		adjuntar 同封する	ADJUNCTUS 隣接した(+ -AR)
	bautismo 洗礼	baptismo 洗礼	BAPTISMUS 洗礼
boda 結婚式		voto 投票, 誓い	VOTUM, -A (pl.) (神への) 誓約
bodega 酒蔵		botica 薬局	APOTECA(M) 貯蔵室
botija 水差し		bottella 瓶	BUTTICULLA(M) 瓶
bueno 良い		bono 債権	BONUS 良い
	cabildo 聖堂参事会員	capítulo 章	CAPITULUM 小さい頭, 章
cadera 腰		cátedra 座椅子	CATHEDRA(M) 肘掛椅子
caldo 煮汁		cálido 熱い	CALIDUS, -UM 熱い
	cardenal 枢機卿	cardinal 基本の	CARDINALIS, -LEM 主要な
catar 味見する		captar 把握する	CAPTARE 得ようと努める
caudal 水量, 財産		capital 資本, 首都	CAPITALIS, -LEM 主要な
celda 独房		célula 細胞	CELLULA(M) 小部屋
cerco 輪		circo サーカス	CIRCUS, -UM 円, 円形競技場
chisme 中傷, 陰口		cisma 教会分裂	SCHISMA 分裂
cimiento 基礎, 土台		cemento セメント	CAEMENTUM 建築石材
clavija 栓, ボルト		clavicula 鎖骨	CLAVICULA(M) 小型の鍵, 鎖骨
cobra コブラ		culebra 蛇	COLUBRA(M) 雌蛇
código コード		códice 写本	CODEX, -CEM 本, 帳簿
coger つかむ		colegir 推論する	COLLIGERE 集める, 得る
cola 尾		cauda (祭礼服の) 長裾	CAUDA(M) 尾
colgar 吊るす		colocar 配置する	COLLOCARE 置く, 据える
colmo 山積み, 極み		cúmulo 蓄積	CUMULUS, -UM 山積み
comprar 買う		comparar 比較する	COMPARARE 繋ぐ, 比較する
comulgar 聖体拝領を受ける		comunicar 伝達する	COMMUNICARE 伝達する
concejo 市(町・村)議会		concilio 教会公会議	CONCILIUM 会合, 議会
consejero 顧問		consiliario 顧問	CONSILIARIUS, UM 助言者

consiguiente 結果的に生じる		consecuente 必然的な	CONSEQUENS, -TEM 続いて起こる
contar 語る		computar 計算する	COMPUTARE 計算する
copla 詩節, 俗謡		cópula 連結	COPULA(M) 帯, 結束
corlar 金色ワニスを塗る		colorar 着色する	COLORARE 色づけする
corvo 湾曲した		curvo 曲がった	CURVUS 曲がった
cosa 物, 事		causa 原因	CAUSA(M) 原因, 理由
coso 街路, 囲い場		curso 講座	CURSUS, -UM 進路, 経歴
costar 値段がかかる		constar 確かである, ～から成る	CONSTARE 存続する
	cota (測量の) 水準	cuota 割当, 会費	QUOTA 何番目の
criar 育てる		crear 創造する	CREARE 産む, 創造する
cuenca 盆地		concha 貝殻	CONCHA(M) 貝殻
cuesta 坂		costa 海岸	COSTA(M) 脇
cuidar 注意する		cogitar 沈思する	COGITARE 思う
cumplimiento 遂行		complemento 補足	COMPLEMENTUM 補足
diezmo 10分の1税		décimo 第10の	DECIMUS, -UM 第10の
dedal 指ぬき		digital デジタルの	DIGITALIS, -LEM 指の
dedo 指		digito アラビア数字	DIGITUS, -UM 指
dehesa 放牧場		defensa 防御	DEFENSA(M) 防御
dejar 残す		laxar 緩める	LAXARE 緩める, 解放する
delgado 痩せた		delicado 繊細な	DELICATUS 魅力的な, 軟弱な
derecho 右の, 権利		directo 直接的な	DIRECTUS 真直ぐな
diseñar 設計する		designar 任命する	DESIGNARE 表示する
doblegar 折り畳む		duplicar 二倍にする	DUPLICARE 二倍にする
dudable 疑わしい		dubitable 疑わしい	DUBITABILIS 疑わしい
embestir 突進する		invertir 付与する	INVESTIRE 纏わせる
emplear 雇う (< Fr.)		implicar 巻き込む	IMPLICARE 包み込む
empujar 押す		impulsar 促進する	IMPULSARE 押す
enjambre (蜜蜂の) 群れ		examen 試験, 検査	EXAMEN (蜂の) 群れ, 審査
entero 全体の		íntegro 完全な	INTEGER, -GRA 無傷な, 全体の
erguir 立てる		erigir 建立する	ERIGERE 建てる, 築く
escuchar 聴く		auscultar 聴診する	AUSCULTARE 傾聴する
espalda 背中		espátula へら	SPATHULA(M) 肩甲骨
España スペイン		Hispania ヒスパニア	HISPANIA(M) ヒスパニア
estero 河口, 沼地		estuario 河口, 入り江	AESTUARIUM 潟, 入り江
estorbar 妨げる		disturbar 妨害する	DISTURBARE 破壊する
estrecho 狭い		estricto 厳密な	STRICTUS 厳格な
frío 寒さ, 寒い, 冷たい		frígido 冷たい	FRIGIDUS 寒い, 冷たい
flotar 浮く (< Fr.)		fluctuar 変動する	FLUCTUARE 波打つ, 動揺する
fraguar 鍛造する		fabricar 製造する	FABRICARI 制作する
fuego 火		foco 焦点	FOCUS, -UM 炉
fuero 特別法		foro 公開討論会	FORUM 公共広場
grado 喜び, 意欲		grato 快い, 無料の	GRATUS お気に入りの
habla 方言, 話し方		fábula 寓話	FABULA(M) 談話, 物語

hallar 見つける		fallar 失敗する	AFFLARE 息を吹きかける
hastío 不快, 嫌悪感		fastidio 厄介	FASTIDIUM 嫌悪感
haz 顔		faz 顔	FACIES, -EM 外観
hebra 糸, 繊維		fibra 繊維, ファイバー	FIBRA(M) 繊維
hechura 仕上がり		factura 請求書	FACTURA(M) 製造
hembra 雌		fémica 女性	FEMINA(M) 女性
heñir 捏ねる		ingir 装う	FINGERE 改造する, 捏造する
heredero 相続人		hereditario 世襲の	HEREDITARIUS, -UM 相続された
hervor 沸騰		fervor 熱狂	FERVOR(EM) 沸騰
hinchar 膨らます		inflar 膨らます	INFLARE 膨らます
hinchazón 膨張		inflación インフレ	INFLATIO(NEM) 膨張
hoja 葉, 用紙		folio 二つ折	FOLIA (n. pl.) 葉
honrar 名誉を与える		honorar 名誉を与える	HONORARE 賞賛する
horma 木型	forma 形, 方式		FORMA(M) 形
hostigar 鞭をあてる		fustigar 叱責する	FUSTIGARE 棍棒で打つ
huesa 墓 (穴)		fosa 墓穴, 溝	FOSSA(M) 溝, 運河
hundir 沈める		fundir 溶かす	FUNDERE 注ぐ, 溶かす
injertar 移植する		insertar 挿入する	INSERTARE 挿入する
isla 島		ínsula 島 [文語]	INSULA(M) 島
jamelgo 痩せ馬		famélico 飢えた	FAMELICUS, -UM 飢えた
jibia コウイカ [動物]		sepia セビア, コウイカ	SEPIA(M) コウイカ
jimio 猿		simio 猿	SIMIUS, -UM 猿
labrar 彫る, 細工する		laborar 耕す, 努力する	LABORARE 働く, 苦しむ
lacio 萎えた, 弛んだ		flácido 緩んだ	FLACCIDUS 弛んだ, 衰えた
ladino ユダヤスペイン語		latino ラテン系の	LATINUS, -UM ラティウム人
lagrimal 涙の		lacrimal 涙の	LACRIMALIS 涙の
leal 忠実な		legal 法律上の	LEGALIS 法律の
lego 平信徒の		laico 世俗の	LAICUS 俗人 (の)
leyenda 伝説		legenda 聖人伝	LEGENDA(M) 聖人伝
liar くくる		ligar 結ぶ, 縛る	LIGARE 結びつける, 縛る
librar 解放する		liberar 解放する	LIBERARE 解放する
limpio きれいな		límpido 清澄な [文語]	LIMPIDUS 澄んだ
linde 境界		límite 限度	LIMES, -ITEM 境界線
lindo かわいい		legítmo 合法的な	LEGITIMUS 合法的な
lidir 戦う		litigar 訴訟する	LITIGARE 論争する
llaga 傷, 潰瘍		plaga 災害, 異常発生	PLAGA(M) 殴打, 傷, 災難
llama 炎		flama 炎 (の輝き)	FLAMMA(M) 炎
llamar 呼ぶ, 連絡する		clamar 嘆願する	CLAMARE 叫ぶ
llave 鍵		clave 手がかり, 鍵	CLAVIS, -VEM 鍵
llegar 着く	plegar 折り畳む		PLICARE 折り曲げる
lleno いっぱいの		pleno 真っ只中の	PLENUS いっぱいの
loar 賞賛する		laudar 判決を言い渡す	LAUDARE 賞賛する
lumbrera 発光体		luminaria イルミネーション	LUMINARIA (n. pl.) ランプ
lugar 場所		local 地方の, 局地的な	LOCALIS, -LEM 場所の

muslo 腿		músculo 筋肉	MUSCULUS, -UM 筋肉
madera 木材		materia 材料	MATERIA(M) 材料, 物質
maleza 雑草		malicia 悪意	MALITIA(M) 悪徳
mancha 染み		mácula 汚れ [文語]	MACULA(M) 汚れ, 染み
mascar 噛む		masticar 噛む	MASTICARE 噛む
menester 必要		ministerio 省庁	MINISTERIUM 奉職
menudo 細かい		minuto 分	MINUTUS, UM 細かい
mesón 食堂 (< Fr.)		mansión 大邸宅	MANSIO(NEM) 滞在, 住居
molde 鋳型		modelo 模型, 模範	MODELLUS,-UM 尺度, 規範
muchedumbre 群衆		multitud 群衆	MULTITUDO, -DINEM 大量, 群衆
mudar 変える		mutar 突然変異を起こす	MUTARE 移動させる, 変える
navidad 降誕祭		natividad 降誕祭	NATIVITAS, -TEM 出生
neto 正味の		nítido 透明な	NITIDUS 明るい, 美しい
nombrar 指名する		nominar 指名する	NOMINARE 指名する
obispo 司教の		episcopal 司教の	EPISCOPALIS 司教の
obra 作品, 工事	ópera オペラ (< It.)		OPERA (n. pl.) 労力, 仕事
obrar 行動する [文語]		operar 手術する	OPERARI 従事する, 遂行する
ochavo 銅貨 [歴史]		octavo 第8の	OCTAVUS, -UM 第8の
ordeñar 搾乳する	ordenar 命令する		ORDINARE 整える
oreja 耳		aurícula 心耳 [解剖]	AURICULA(M) 耳
palabra 単語		parabola 寓話	PARABOLA(M) 寓話
pereza 怠惰		pigricia 怠惰 [文語]	PIGRITIA(M) 怠惰
perjuicio 損害		preju(d)icio 先入観	PRAEJUDICIUM 予審, 先入観
pesar 量る		pensar 考える	PENSARE 重さを量る
plática 会話		práctica 実践	PRACTICE(M) 実際
posar そっと置く		pausar 中断する	PAUSARE 止まる, 休む
prójimo 隣人		próximo 次の	PROXIMUS, -UM 次の
prudencia 慎重		providencia 摂理	PROVIDENTIA(M) 先見の明, 摂理
pulpo 蛸		pólipo ポリープ	POLYPUS, -UM 蛸, ポリープ
punzar 刺す, 突く		pungir 刺す, 突く	PUNGERE 刺す
pupitre 教室机		púlpito 説教壇	PULPITUM 演壇
quedo 静かな		quieto 不動の, 静かな	QUIETUS 休息している, 平穏な
ralo 疎らな		raro 稀な, 奇妙な	RARUS 疎らな, 稀な
raudo 速い [文語]		rápido 速い	RAPIDUS 速い
razón 理由, 道理		ración1 皿分	RATIO(NEM) 計算, 説明, 理性
recorrer 巡る		recurrir 頼る, 訴える	RECURRERE 走って帰る
redondo 丸い		rotundo 断固とした	ROTUNDUS 丸い
reja 格子	regla 規則		REGULA(M) 定規, 原則
reseñar 書評する		resignar 辞任する	RESIGNARE 封を切る, 無効にする
	respeto 尊敬	respecto 関連	RESPECTUS, -UM 配慮
rodar 転がる		rotar 交代する	ROTARE 回す, 転がす
rollo フィルム 1本		rótulo 看板, 標識	(LL.) ROTULUS, -UM 小型の車輪
rotura 破壊		ruptura 破壊	RUPTURA(M) 破裂
ruido 騒音		rugido 吠え声	RUGITUS, -UM 吠え声
rumbo 方向, 針路		rombo 菱形	RHOMBUS, -UM (魔術用の) 輪

salvaje 野生の (< Fr.)		selvático 森林の, 未開の	*SALVATICUS 森の, 野生の
santiguar 十字を切る		santificar 聖化する	SANCTUS+ FACERE 神聖にする
	seglar 在俗の	secular 世俗の, 何百年の	SAECULARIS 百年ごとの, 世俗の
sencillo 平易な		singular 並外れた	SINGULARIS 独特の
siesta シエスタ		sexta 第6の	(HORA) SEXTA (abl.) 第6(時)
	sino 運命	signo 印, 記号, サイン	SIGNUM 印, 跡
sobrar 余っている		superar 超える	SUPERARE 上回る
soltero 独身の		solitario 寂しい	SOLITARIUS 孤独な
somero 浅い, 表面的な		sumario 要約	SUMMARIUS, -UM 要約された
tajar 切り刻む		tallar 彫る, 研磨する	TALIARE 切る
talante 機嫌	talento 才能		TALENTUM 志向, 性向
templar 和らげる		temperar 緩和する	TEMPERARE 調節する
tieso 硬直した		tenso 張り詰めた	TENSUS 張り詰めた
tilde 波形符		título 題目	TITULUS, -UM 碑文, 称号
tonto 馬鹿な		atónito びっくりした	ATTONITUS 仰天した
tronar 雷が鳴る		tonar 雷が鳴る [文語]	TONARE 雷が鳴る
turnar (se) 順繰りにする		tornar 戻る [文語]	TORNARE (ろくろで) 丸くする
	traición 裏切り	tradición 伝統	TRADITIO (NEM) 引渡し, 伝承
travieso いたづらな		transverso 横向きの	TRANSVERSUS 斜めの
vaina 鞘		vagina 膣 [解剖]	VAGINA(M) 鞘
varón 男性		barón 男爵	BARO (NEM) 戦士
velar 徹夜する		vigilar 監視する	VIGILARE 徹夜する
vengar 復讐する		vindicar 復讐する, 主張する	VINDICARE (所有権を) 主張する
vergüenza 恥ずかしさ		verecundia 羞恥心	VERECUNDIA(M) 恥じらい
viaje 旅行 (< Fr.)		viático 公務旅行 [歴史]	VIATICUM 旅費
yema 黄身		gema 芽, 宝石	GEMMA(M) 芽, 宝石

二重語(2)：民衆語 vs ラテン語直接借用語

vulgarismos	latinismos	étimos
campo 野原, 競技場	campus キャンパス	CAMPUS, -UM 平地
cuero 体	corpus コーパス	CORPUS, -UM 体
hecho 事実	facto 事実 (上)	FACTUS, -UM 作られた
león ライオン	leo しし座	LEO, -NEM ライオン
pez 魚	piscis うお座	PISCIS, -CEM 魚
toro 雄牛	tauro おうし座	TAURUS, -UM 雄牛
veo 見る (現1単)	video ビデオ	VIDEO (< VIDERE) 見る
yo 私	ego 自我	EGO 私

三重語 (斜体: 民衆語)

<i>bicho</i> 虫	<i>bicha</i> 蛇	bestia 獣, 家畜	BESTIA 獣 > -a/ (LL.) BESTIUS > -o
<i>chato</i> 鼻の低い	<i>plato</i> 皿	plata 銀	*PLATTUS 平らな, 皿, 薄板
<i>dado</i> 特定の	<i>dato</i> データ	data 日付と発信地	DATUM > -o/-TA (n. pl.) > -a 与えられた
<i>dueña</i> 女主人	<i>doña</i> ~夫人	dama 貴婦人	DOMINA 女主人
<i>dueño</i> 主人	<i>don</i> ~殿	dómine ラテン語教師	DOMINUS 主人
<i>enterar</i> 知らせる	<i>entregar</i> 手渡す	integrar 統合する	INTEGRARE 復旧する, 完全にする
<i>llano</i> 平らな	<i>piano</i> ピアノ (< It.)	plano 平らな, 平面図	PLANUS 平らな
<i>llevar</i> 運ぶ	<i>levantar</i> 起こす	levar 持ち上げる	LEVARE 持ち上げる
<i>hilo</i> 糸	<i>filo</i> 刃	fila 列	FILUM 糸 > -o / -LA (n. pl.) > -a
<i>hotel</i> ホテル (< Fr.)	<i>hostal</i> 安宿 (< Cat.)	hospital 病院	HOSPITALE 客室
<i>pellejo</i> 皮革	<i>pelleja</i> 毛皮	película フィルム, 皮膜	PELLICULA(M) 毛皮 > -a > -o
<i>pimiento</i> ピーマン	<i>pimienta</i> 胡椒	pigmento 顔料	PIGMENTUM 顔料 > -o > -a
<i>plazo</i> 期間	<i>pleito</i> 訴訟	plácito 意見	PLACITUM 決定されたこと
<i>rayo</i> 光線, 稲妻	<i>raya</i> 線	radio 半径, ラジオ	RADIUS, -UM 棒, 半径 / (LL.) RADIA

四重語 (斜体: 民衆語)

<i>timbre</i> ベル	<i>timbal</i> ティンパニー	témpano 氷片	tímpano 小太鼓	TYMPANUS 太鼓
------------------	----------------------	------------	-------------	-------------

- * 一覧表はすべて筆者が作成した。
- * ギリシア語およびラテン語以外の言語に起源を遡る語彙は除外した。
- * 表中の (LL.) は「後期ラテン語 (= Later Latin)」を表す。

